

氏名（本籍）	チョウ シュンケツ ZHANG JUNJIE（中華人民共和国）
学位の種類	博士（芸術）
学位記番号	甲第155号
学位授与年月日	2024年3月22日
学位授与の要件	広島市立大学大学院学則第36条第2項及び広島市立大学学位規程第3条第2項の規定による
学位論文題目	『武漢大学旧図書館の伝統的な建築様式を活用した造形方法に関する研究』
論文審査委員	主査 教授 吉田 幸弘 委員 教授 伊東 敏光 委員 准教授 古堅 太郎 委員 准教授 石松 紀子 委員 谷藤 史彦（下瀬美術館 副館長）

論文内容の要旨

中国は1978年の改革開放政策まで世界から隔絶されていたが、開放後わずか40年で情報社会へと突入した。しかし、社会変革と技術更新を短期間かつ同時進行で実施した結果、伝統は現代社会から分断されてしまった。特に建築においてこの問題は顕著である。

未来にむけて他文化の建築と区別できる建築芸術を創造するには、建築の価値と文化を見直す必要がある。だが、現代の中国建築は国際化の過程で伝統的な建築文化を軽視している。中でも、現在みられる現代の大学の建築は機能性を追求する一方で、建築的特徴が乏しいという問題に陥っている。中国の高等教育の普及に伴い学生数が年々増加しており、大学キャンパス施設の新設・拡大が急務となっている。

本研究の対象である武漢大学は、中国で最初に建設された大学の一つであり、中国の大学が近代化する過程を経た重要な大学として位置づけられている。本研究では、武漢大学の建築のうち26棟は中国政府によって文化財に指定されており、歴史的建造物は中国の伝統的なスタイルを持ち、中国の伝統的な建造物から現代建築への進化について考察するための良い事例である。武漢大学旧図書館（1936年建設）は、これまで述べたように伝統的な設計の特性を持っており、中国では異例である。そして、旧図書館における現状の課題や開学以来の設計理念を分析し、そこから得られる知見から、未来の図書館建築を概念モデル・提案するものである。キャンパス内の施設を拡大・新設しなければならない現状において、歴史的建造物をいかに継承、活用していくのかは、中国の建築の未来に大きく影響を及ぼす。目まぐるしく変化する中国社会の中で、建築も急速に変化している現状に立脚し、伝統と現代の関係性について再考することは、これからの建築が果たすべき任務である。

本研究が武漢大学旧図書館に着目する理由は、この旧図書館が、西洋の古典建築と中国の古典建築、つまり西洋と中国の造形意匠を折衷した近代建築の初期作だからである。本論では、中国の古典建築や造形意匠の代表例として、明堂建築を考察する。明堂は、武漢大学旧図書館の原型となった建築であるため、未来図書館の概念モデルを設計する際にも、外見的な空間や意匠のみならず、伝統文化や様式からなる、建築の内面的な要素をも継承することが重要である。

本研究では、伝統建築を継承するための4つの要素のアプローチとして、建築の原型、建築の意匠、キャンパスの軸線、地域環境の4つの側面観点の活用を提案する。建築設計における原型や意匠、そして立地をレイアウトする軸線、これらの背後には必ず設計思想が存在する。「過去の建築から何を継承し、未来に何を伝承するのか。」この設計思想の連鎖が歴史や文化を

形成する。ここで本論の考察を先どりして紹介しておくとして、明堂建築の背後には、設計思想として建築物と自然環境との調和が追求されている。これは、自然と人とは一体であるとする中国古代の思想を根源としている。このような自然と人との調和を追求する思想は、(古代のみならず)現代においても重視すべき思想である。

武漢大学のキャンパスはおよそ一世紀にわたる歴史の中で社会の変遷を経験し、最終的に今のキャンパスを形成した。そのため、キャンパスの未来を想像するためには、歴史的な建造物の保護だけでなく、その文化的な脈絡について検証する必要がある。未来の新しい建築においては、歴史的建築の原型、意匠、キャンパスの軸線を継承することで、武漢大学の文化を継承することができる。同時に利用者にとっても、親しみや納得感を得られるような建築を目指す。そして、武漢大学の歴史的建築を研究することは、中国現代建築と歴史的建造物の継承に重要な役割を果たすことができると考えられる。

本論文の章構成は次のとおりである。

第1章では、武漢大学キャンパスと旧図書館の歴史や造形について分析と論証を行う。主に十字軸線によるキャンパス配置の設計、旧図書館の造形と構造、ファサード(建築立面)、平面を分析し、その原型・法則に西洋古典建築のファサード構図と西漢時代の明堂があることを立証する。

第2章では、武漢大学旧図書館と武漢大学新図書館について、現地調査、アンケート調査、インタビュー調査を行い、異なる時代背景において建設された新旧2つの図書館の現状や課題を把握し、その造形及び両者の関連・相違点を確認する。旧図書館の設計から明堂の理念を再度分析することで新たな知見を得る。そこから2つの図書館を造形や機能の面から分析し、中立的なデータを得て本研究の証左とする。

第3章では、建築の「建築の原型」「建築の意匠」「キャンパスの軸線」「建築と地域環境の調和」という4つの観点から旧図書館における古典建築の継承法を検討し、旧図書館の原型である明堂は陰陽五行、天人合一の理念を体現した建築であり、それは調和、均衡、統一を追求する哲学思想が源流にある。

第4章では、武漢大学の未来の図書館建築について概念モデルを作成し検証する。具体的には4つの原理(①明堂原型に基づき設計する。②意匠の観点から歴史建築の造形、形式、構造、材料などを利用する。③大学キャンパスの軸線構想を継承・発展させる観点から設計を行う。④建築と環境との関係という観点から設計を行う)これらを基本としながら、平尾が提唱した放射型の形状手法と武漢大学にゆかりがある花である桜の図形を取り入れ、幾何学的で整然とした構成の中にダイナミックな空間を創造する。

結論では、伝統建築の伝承ために「建築の原型」「建築の意匠」「キャンパスの軸線」「建築と地域環境の調和」という4つの観点から、現代建築と伝統建築との間に関連を持たせる意義の確認を行い、本研究における独自の観点と貢献について今後の研究への期待とともに述べていく。また現代社会の要請を満たすためだけの建築ではなく、伝統的な建築様式と文化を継承する方法と、その可能性を有している点についても併せて示す。

論文審査の結果の要旨

張俊傑は、博士学位本審査に論文「武漢大学旧図書館の建築原理を活用した造形方法に関する研究」並びに研究作品「未来の図書館」の他、概念モデル「武漢大学キャンパスのモデル」等の計11点を提出した。

論文では武漢大学の図書館に焦点をあて、東洋や西洋の古典的な建築の特徴や新旧の図書館の構造を分析しながら、中国の伝統建築の原型を継承、発展させる方法について考察し、建築原

型の継承方法を分析して伝統建築の原型を抽出しながら、周囲の景観や環境に配慮した未来図書館の概念モデルを提示していることは高く評価できる。

作品では、その造形の規範を中国古代の明堂を起点とした伝統的建築様式に置き、その様式を独自のデザインに置き換えることで新たな造形を創造している。未来の図書館の造形においては、キャンパス内の軸線の再設定による未来図書館の概念モデルの作成により、造形のコンセプトがより明確となっている。

明堂や旧図書館の歴史、建築造形、思想などを丁寧に分析しながら、伝統的な建築様式を継承した独自の視点による論文と、そこから導き出された概念モデル、未来の図書館モデルは高く評価できる。

以上のことから、論文審査合格、作品審査合格、総合審査合格とする。